

旅にはいろんな楽しみがある。

日本ではなかなか目にしないような美味しいものを食べたり、安い買い物をして嬉しくなったり、美しい景色に感動したり、という楽しみだ。

ただそれは、一般的な旅行でも達成できる事で、私の場合、それだけではだんだんと物足りなくなる。

求めるのは、現地の人々とのふれあいなのだ。

ただこれは、必ずしも達成できないところが難しい。

普通に宿に泊まり、遺跡や観光スポットを観て、足早に移動する時にはなかなか出遭えない。

長距離バスの移動中とか、温泉でくつろいでいる時とか、酒場で飲んだくれていた時とか、さらにはトラブルにあってどうしようもなくなった時などに突然やってくる。

このパラオ、特にペリリュー島の旅は、モンゴルや台湾と同じように現地の人たちに深く接する事が出来た貴重な旅となった。

ペリリュー島の戦跡については既にも書いているので、今度は島のカルチャーの話を中心に進めてみたい。

ソフトボール大会

ペリリュー島に来た翌日に、この島の一大イベントであるソフトボール大会があるという。

このソフトボールは、パラオの国民の祝日である『青年の日』を祝うイベントで、この島の人口600の内、150人程度が参加する。参加できない子供と年寄りもいるから、かなりの参加率だ。

そして女性も男性もレベルが結構高い。



国民の祝日である『青年の日』を記念するペリリュー島のソフトボール大会。男子は6チーム、女子は4チームが参加。

娯楽がないからだろうか、パラオの人達は小さな子供の頃から野球やソフトボールに親しんでいる。その遊ぶボールは、大人が使う重いソフトボールだったりするので、肩はめっぽう強くなるみたいだ。

そしてやはり娯楽がないからだろうか、数年前に『青年の日』の以外にもソフトボールをやろうか、という話になり、小学校の校庭を利用して、夕方から毎日一試合ずつ行っている。

今日の試合は、これまでの様な練習試合的なものではなく、公式試合という位置づけで、各チームユニホームを着ている人が多い。振る舞いアイスクリームも登場し、ちり紙交換の様なトラックのスピーカーを利用して、球場アナウンスまで流れている。

このアナウンスが面白い。

『ウッター』と聞こえた。確かにバッターが打った時にそう言っている。日本語だ。

そして時折、『イチバン (人の名前)』と言っていた。何故か、二番から十番バッターをアナウンスする時はパラオ語なのがおかしい(パラオのソフトボールは10人制)

さてこのソフトボール大会、私も、宿の近くのチームに参加させてもらえる事になった。ごく当たり前の様に、風来坊の日本人を受け入れてくれるところが嬉しい。

みな真剣にプレーしているが、それでもダイビングキャッチをやるほどではない。私の場合、ホームランこそ打てなかったが、体は昔の記憶を頼りに動くので、結果としてハッスルプレーに映ったようだ(学生の頃に比べて 1.5 倍になった体の動きが、あまりに涙ぐましかったという噂もある)。

『お前は日本で野球をやっていたのか』

と何人にも聞かれ、そしてソフトボールがきっかけでこの島の多くの人と仲良くなれた。

スキューバダイビングに来ていたドイツ人数人がソフトボールを観戦している。ドイツ人に、ルールは分かるのか、と尋ねてみると、ちっともわからないという。そして何でこの国の人間はサッカーをやらないのか、と不満そうだった(日本がパラオをドイツから奪わなければ、今頃はサッカーがメジャースポーツだったかも)。

余談ながら、この島の近くにある『ブルーコーナー』や『ジャーマンチャンネル』と呼ばれるダイビングスポットの数々は、世界的に有名で、その為、ドイツの様な遠い場所からも訪れる人が多い。

因みにこのドイツ人達、休暇を利用して、3週間の予定でこの島に来ているらしい。一人当たりの予算が40~50万円だと、何ともうらやましい。



むちゃくちゃきれいな浅瀬の海。これ以上ないというエメラルドグリーン。時々魚が飛び跳ねている。

また別のドイツ人は、私が船で2時間掛けてコロール島からペリリュー島に来た工程を、一人乗りカヤックで3日掛けてきたそうだ。途中無人島に泊りながら。食料は魚を釣って食べたらしい。

白人ってのは本当にそういうワイルドな旅が好きだ。

バーベキュー大会

その夜、ソフトボール大会を記念して、バーベキュー大会があった。お前も選手だったんだから来い、と誘われて、行く事に。

会場は、ペリリュー島唯一のピリヤード場。プールが2台もある(人口300人に1台だ!)

開始予定は午後 6 時だったらしいのだが、実際に始まったのは 10 時頃。南の国にはありがちな、パラオ時間というやつらしい。

どこからともなく持ってきた鶏肉と、さっき釣ってきたというような魚を、ドラム缶を加工したバーベキューセットで焼く。



同じく『青年の日』を記念するバーベキュー大会。ドラム缶で焼く地鶏が最高に美味しい。

アメリカの音楽ががんがん流れ、ある人はビリヤードをし、ある人はフロアーでダンスをしている。

酔っ払った女性が、何度も私をダンスに誘い、頬にぶちゅぶちゅとチュウするのでまいった。因みに彼女は 50 近くである。

私は途中で帰ることにした。

ビリヤード場から宿までの夜道を歩いていると、

『おまえ、今日ソフトボールに出ていたな、どこまで帰るんだ』と車が停まってくれた。

この日以降、いつもこんな調子だ。どこまでも親切なパラオ人なのである。

出稼ぎについて

翌日、バーベキューをやったビリヤード場に行ってみる。

ここの店員がやたらと英語がうまいと思ったら、案の定フィリピン人だった。こんな島まで出稼ぎに来ている外国人がいるのだ。

昨日の事を聞いたら、朝の 6 時までパーティーが続いていたそうだ。

その彼に出稼ぎの話聞く。

パラオに来て数ヶ月。まだ新参者だそうだ。

このバーの仕事、休みの日は一切なし。朝来て掃除して、夜にお店を開けるらしい。客がいる間はずっとお店を開けている。だから何時に終わるかわからない。ビリヤードは 1 ゲーム 75 セント。ビールは 1 缶 2.5 ドルだそうだ。

パラオ人は時として破滅的に飲んでしまう事があるらしい。

客が付けで買おうとしたら、1 本だけ出して後はお店を閉めるなんてルールがあるという事だった。

そんな彼の月収は 150 ドルとのこと。

因みに、人口 600 人のこの島に、ネパール人は 3 人、フィリピン人 20 数人、日本人 4 人、あとは韓国人がいるらしい。

日本人は、ダイビング関係が 3 人、小学校の先生(JICA の派遣)が 1 人である。

この 4 人の方は実に生き生きとしていたのが印象的だった。

ペリリュー島で泊まった宿に併設されている商店にも外国人がいる。

こちらはネパール人だ。

彼女に、パラオの暮らしはどうかと聞いてみると、

「退屈すぎて、時間を潰すのがたいへん。早く、カトマンズに帰りたい」

と言っていた。

彼女の月収は 225 ドルである。その金額には満足しているようだが、働いている間はカトマンズには戻れない。



ペリリュー島のお店。映っているのはネパール人。かりんとうやサーターアングギーも売っている。

ペリリュー島の宿

その名を、Mayumi Inn という。オーナーはマユミさんという 60 才のおばちゃんだ。

てっきり日本人かと思ったら、純粋なパラオ人だった。こんな具合に、日本人の名前をつけたパラオ人が多い。そして、マユミさんは、この 600 人の島に 3 人もいるという話だった(一人は日本人)。

値段は、部屋にエアコンが付いていて 22 ドルだ。これは 1 ベッドの料金で、混んでいる時には相部屋になる。

ここにもフィリピン人のお手伝いさんがいて、こぎれいに掃除されている。

食堂には日米の大きな国旗が飾られている。終戦当時の写真も飾ってあった。

食事は、朝/昼/晩が、6/10/12 ドルらしい。私は高いので食べない事にした。

慰霊団が来ると、この食堂で食べる事が多いらしい。ベッドの数の何倍もの座席があって、40 人くらいは入れる大きな食堂なのだ。

ここで、朝ご飯を食べた人に聞いたら、何と出てきたのはサッポロ一番だったらしい。それで 6 ドル。食べなくて良かった。

島の暮らし

宿で自転車を借り、島民の生活ぶりを眺めてみる。

強烈に照りつける太陽の下、木陰ではの～んびりとした雰囲気支配している。

ふと見ると、ある家の人が大きな木の下ハンモックで午後のひとときを過ごしている。海からのそよ風も吹いて、実に気持ちよさそう。

まさに南の島。ペリリュー島は、リゾートというほどではないが、椰子の葉がそよ風に揺らぎ、痛いほどの日差しがやわらげられてハンモック



ツタが伸びた大きな木の下につるしたハンモックで寝ている。そよ風が吹いて、とても気持ちよさそう。

に寝ている彼をなでる。

南国ではどこでもそうだが、人々はあくせくしない。のんびりのんびり生きている。それもまた幸せな事だと思う。

一方の私。今すぐやるべきことなど何も無いはずである。

しかし私の中にある旅人のリズムは、気を付けないとアツという間に都会のビジネスマンのスピードに戻ってしまい、アップビートを刻んでしまうのだった。

何かをしなくてはならない、何かを見に行かねばならない、あれは何だこれは何だ、という潜在意識の中の強迫観念が頭にもたげて来る。そして何となくのんびりしている状態は、私を何時の間にか居心地の悪いものにしてしまう。

そして結局はごちゃごちゃした日々を送ってしまうことも多いのだった。

パラオに来て、そうならない様に特に気をつけているが、それでも今日もまた、昼は熱心に戦跡巡りなどをしてしまっている。

このハンモックに揺られて、1週間ほど強制的に何もしなかったら、一体何が起こるのだろうか。

サマーハウス

ソフトボールで同じチームなった人たちの、

【サマーハウス】と呼ばれる溜まり場がある。

このサマーハウスというのは、一般に壁の無い

平屋の家を指す様だ。床は高床式になっている。

集落ごとに幾つかあって、ここに近所の人が集まってきて、飯を食ったりだべったり、昼寝したりする。娯楽室兼休憩室みたいなもんだ。

サマーハウスによってはテレビやラジオ、扇風機などがある。暑いパラオにはぴったりの設備で、みんなここでくつろいでいる。

周囲には緑が一杯で、その割に沿岸沿いだから風が通って実に気持ちが良い。



典型的なサマーハウス。高床式の床にごろっと寝転がる。海岸沿いなので風が吹きぬけてとても気持ちが良い。

私はほぼ毎晩、このサマーハウスでこの島に住む人達と飲んだくれていたのだった。

飲み物は、ビールかムーンシャインと呼ばれる焼酎。

500mlのペットボトルに、355ml(20 fl. Oz.)だけ入っているパラオの焼酎で、アルコールの度数は37%。無色透明。ラベルには、Apolloと書いてある。

この島の人々は、誰もその原料を知らなかったが、首都のコロール島にもどって人に聞くと、どうやらタピオカから作っているらしい。

その工場は、首都コロールに近いバベルダオブ島にあるのだが、不思議にもコロールではあまり売っていない。一方遠く離れたこのペリリュー島には、どのお店にも売っているという変な焼酎なのだった。

つまみは、タロイモ、タピオカに、圧巻なのがマグロのフライ。これが実に美味くってたまらない。

島の人々は、たまに漁に出て、魚を大量に冷凍しておくようだ。このサマーハウスには巨大な冷凍庫が備わっている。人によっては野菜を栽培している。

ここのサマーハウスにいる連中は、昼間も夜もあまり働いていない。

だからこそ、私の戦跡巡りにも付き合ってくれているのだが、どうやって生活しているのか、最初はとても不思議だった。

酒と煙草以外にはあまり金を使わないのであくせく働く必要がない、というのが私の結論だ。

それでも現金は必要だ。そんな時には公共事業で日雇いの様に働くらしい。

大体、パラオの人たちの半分は国の役人という噂がある。多くは道路や橋の建設など公共事業で働いているという話だ。

次はそれに絡む話。

援助について

さてさて、何でこんなに物価が高いんだろう？ という質問を誰かにすると、返ってくるのは、「ほとんど輸入品だからね」

という回答。

いや、まあそれは分かっているんだけど、なんでそれで経済が維持できているのか、という点が焦点なのだ。

“日商岩井時代の元同僚がエコノミストとしてテレビに登場するほどの私”が出した結論は3つ。

(どなんだよ、それ)

通貨がドルである。

パラオの通貨はドルである。もしパラオドルなんてものを導入したら、誰も保有したがいだらうから、通貨の下落に伴って物価もある程度下落するはずだけど、ドルはどこまで行ってもドルだから、物価もとても安定している。

おまけにパラオ人ってば、とても大らかなので、値づけが、1ドルの次は1.25ドル、その次は1.5ドル...、なんて事を平気でやって、何時の間にか物価が底上げされている模様。

何とか生きて行ける

パラオ人は、あまり働かない。がつがつもしていない。

「物が高ければ、買わなきゃいいじゃん」みたいなところがある。それでも生きていけるのである。海に行けば魚がいるし、山に行けば芋がある。お店が物の値段を幾らに設定しようと、まあどうでもいいさ、みたいな感じがあるのだ。

援助がものすごい。

調べてみると、凄い事が分かった。物価が高いのは、多分、この の理由が一番大きいので

はなかるうか。

日本からの援助が年間 24 億円もあるのだ。人口 2 万人だから、国民一人当たり年間 12 万円。月間 1 万円ということになる。

もちろん現ナマで渡している訳ではないし、あこぎな商社が介在していれば現地に落ちるお金は目減りするが、それにしても一人当たりで見ると巨額である。

(前大統領は、ナカムラという日系 3 世なのだが、少しは関係があるのかもしれない)。

加えて日本よりは少ないが、アメリカの援助がある。

アメリカの財政援助は、一応 2009 年にが終了する事になっているらしい。それまでに、いかにして経済自立を図るかがパラオの国家的課題になっている。

大統領の言う事が憎い。

「如何にして、援助のリソースを拡大するかが鍵だ...」

しかしアメリカの援助に絡んでこんな話を聞いた。

国連の信託統治の意義は、本来その国を独立へと導くために援助、指導するものであるが、アメリカは、重要な軍事拠点になりうる位置にあるパラオを、出来るだけ長く統治下に置き、いずれはアメリカに併合しようと考えていたという(この方針は、ソロモン・レポートというものに書いてあるらしい)。

発展が見込める産業を育てない中で金銭だけ援助されると、被援助国の労働意欲は著しく低下する事は、国際援助の常識になっている昨今、アメリカの政策は、戦前に日本が築いた仕組みと同等かそれ以上の産業・教育システムを整備するのではなく、反対に単純な財政援助ばかり行われてきて、それは今もある程度続いているらしい。

良いか、悪かは別として、日本時代の勤勉さは今となっては皆無である。

さて、アメリカのせいかどうかは別として、何度も書くが、パラオ人はあまり働かない。現業労働者から専門職まで、働いているのは賃金の安いアジア系外国人(特にフィリピン人)なのだ。

パラオには約 4～5 千人のフィリピン人がいるらしい。人口 2 万人のパラオである(ガイドブックによるとフィリピン人を入れてこの数字らしい)。

パラオに来て最初は、パラオ語とは何とタガログ語に響きが似ているのだろう、と思っていた。確かに、グアムよりもフィリピンの方が地理的に近い。東京～札幌間程度の距離なので、言葉が似ていても当たり前、と信じていたのだが、実は会う人会う人、みんなフィリピン人だったのだ。そして同時に、パラオ人ってやたら英語が上手いなあ、と思っていたのも誤解だと分かった。

パラオでは、フィリピン人は安い労働力なのだ。旅行者が接する事が多いのは、必然的に店の店員が多いが、そうした労働力は、フィリピン人が中心である。中にはバングラディッシュ、ネパールなんてのもいる。

因みに、パラオの一人あたり GDP は太平洋島嶼諸国では突出して高い。他の国々が 2000 ドル以下に対し、パラオは 6000～8000 ドルらしい。

日本において、膨大な酒税を収めている私としては、今まで知らなかったこの国へ、こんなにお金が出ている事を知り、そしてこの国の労働実態を知り、実に複雑な気分である。また、もしこの国で、テロや日本人の殺害事件などが起きたなら、唯一の観光産業が相当のダメージを受けるに違いないなどと心配してしまうのだ。

JICA な人々

JICA の若者が世界各地で働いている事は知っていたが、この放浪では一度も会った事が無かった。ところが、このパラオで、何人もの JICA な人々に出会ったのである。

聞けば、ちっぽけなこの国に 40 数名も派遣されているらしい。

確かに国は若い。国の制度や仕組み作りもこれからで、人材が不足しているのも理解できる。しかしながら、国民が海外旅行できる様なこの国に、日本の貴重な若者をこれだけ多く派遣する理由が、私には今一つ理解できないのであった。

まあ、その海外協力隊員の働きによって、日本を身近に感じ、より親日的になっているという面もあるだろうな(とフォローしておこう)。

パラオの教育システム

ペリリュー島には小学校が 1 校あるだけ。小学校は 8 年制である。

クラスは学年ごと。学年によって 8 人から 22 人いる。

教室は日本と同じ感じ。黒板があり、子供たちの作った作品が壁に飾られている。

クーラーはないが大きな扇風機がある。

学校には図書館もコンピュータールームもあるので、設備自体は日本とあまり変わらない。

そして実は、教育問題も日本と変わらずにあるらしい。他の子をいじめたり、授業への集中力が著しくなかったり、という問題だ。

パラオでは、隠れ一夫多妻制みたいな事が少なからずあるらしい。アメリカに似て離婚も多い。結果として非嫡子の子供、片親の子供が比較的多く、親の愛情が不足しがちという実態があるらしい(ただ救われるのは、日本と違い家族構成の実態を隠しようがなく、子供たちが、あっけらかんとしているところだそう)。

英語は 1 年生から習う。吸収が早いからか、もういっぴしの国際人の様に英語を操り、今の大人達よりも断然上手い。娯楽が少ないせいで、アメリカの映画を良く見るという事も上達を助けているようである。



パラオの学校。物資が豊富で、あまり日本と変わらない印象を受けた。

この小学校を卒業すると、子供たちは、首都コロールにある高校に進学する。そこにも行って見た。

校庭に、黄色いバスが停まっている。こんなところまでアメリカナイズされている。

小学校は8年制で、高校は4年制なので、義務教育は結局日本と同じ12年間である。

パラオは数多くの島で構成されている。

小学校は多くの島に数多くあるらしいが、高校は3校だけ、しかも首都のあるコロール島だけだ。

パラオには4年制の大学はない。2年制の短大が1校あるのみだ。ただし奨学制度が充実しているらしく、多くの学生が、グアムやサイパンの大学に行くらしい。



首都コロールにあるパラオ高校。当然ながらほぼ全員が“顔黒”高校生だが、とても純情そう。

JICAから先生としてパラオに派遣される人がたくさんいる。

その一人が、先生達の間で言われている事として、こんな事を語ってくれた。

教育を受けたくても受けられない貧しい国々の子供たちに何とか教えてあげたい、そんな気持ちで皆応募したのだが、パラオでは、教育を受けたくても受けられないという状況ではなく、日本で教えるのとほとんど変わらない感じがする...、というのだ。

パラオ国としての支出は、パラオ人の教員の場合には約400ドルの給与、日本人の派遣教員には100ドルの援助(ホームステイ分をパラオ国が出すらしい)ということなので、言ってしまうと、『人件費の安い労働力』という位置づけになってしまっていると。

まあ、それは教える側の事情で、日本人に教わる子供達が国際人に一步近づくという意味ではたいへん意義がある(とフォローしておこう)。

医療システム

ペリリュー島唯一の病院には日本の救急車が停まっている。

『勝田消防署』と書かれていた。日本からの援助なのかもしれない。

お医者さんは一人だという事だった。島の人は一回見てもらうと1ドル払う事になっているらしい。そんなおおざっぱな所がなかなか素敵である。

さすがに、「最近過労気味で...」という相談はないんだろうな。

次の国へつづく



ペリリュー島の病院。噂によると、一回1ドルらしい。救急車は日本のもので、「勝田消防署」と書いてあった。